

四怪

イチ

1.

去年、聖アグニヤ宇克教会へ行つた。リヨウチの遺した日記を読んで、そう思いたつたのだ。「宇克へ行き、なにも聞かなかつた」という簡潔な一文は、私に江口栄造をして音楽の至高と言わしめたあの高名な鐘の音を連想させた。

窪塚さんと会庭さん、そして彼の同輩と私、宇克へ行ったのは四人だつた。鷗東空港から日産で車を借りて、会庭さんの運転のもと約十キロの道を行く。新緑の季節だつた。こんもりとした宇克山の方向へきつい坂をのろのろ行くと、家々や街路樹の奥に灰がかつた薄青の尖塔が見えた。

石垣を左手に手繰つて歩いて行くと、やがて正門に着く。後期ユティルト様式の装飾が施された鉄柵は開き、その建築が一望できた。聖アグニヤ宇克教会は殆ど廃墟だつた。色褪せた瓦屋根やイヌツボゲが繁茂する白漆喰の壁、そして何よりその庭が物凄かつた。何処から入り込んだのであろう真赤なヤゴソウが一面を覆つて、花盛りに視界下部をどぎつく染め上げている。時の奥へ消えかかつたこの空間の中に地下からむせ返る鼓動を感じて、なにか現実のものでないような気がした。

錠が下りたファサードの観音扉の代わりに割れた窓から中に入ると、そこは暗かつた。ハリストスの水車を模した建築構造は円形を八等分するように側柱が並び、中心に収束している。がらんどうの至聖所には、蠟燭が一本立っていた。窪塚さんがそこへ火を灯したいと言うので、私達は彼女を残して鐘楼へ登ることにした。狭い螺旋階段を抜けると薫風が差し込む展望台に出る。しかしそこに私の期待したような光景は無く、両手で抱えるくらい鐘は取り外されてひっくり返っていた。私は一人帰ることにした。

その後、私は聖アグニヤ宇克教会を調べてみた。HPを閲覧すると、平日午前十時から午後五時までの拝観時間が設けられ、毎週日曜の正午にあの鐘の音が聞けるといふ。私は首を捻つたが、もうそこへ行くことはないだろう。

2.

活蛭を買ってきた。味噌汁にしよつと思つたのだ。どうやら砂抜きをしなくてはならないらしく、私はポウルに水を張り、塩を少しばかり入れ、そこへパックの中身を流し込んだ。そして、揺れる水面の下に山となつた蛭をポウルの曲面に押し付けて、重なつた個体がないようにする。これが良いらしい。

私はボウルを抱えて流し台を離れ、ベッド脇の机に置いた。

部屋は暗いが、カーテンの隙間から白い光が漏れている。家の前の街頭がいつの間にか煌々とした白色灯に交換されていたのだ。

真夜中にも関わらず薄明るい室内で、私はベッドに寝転びボウルの中を覗いた。群島のように顔を出す貝殻で盛り上がった水面を繋ぐように光が反射をしている。その光が揺れた。貝が動いたらしい。

白い円の底に黒く命が溜まり、その中に白い舌や管が見え隠れしている。薄く開いた二枚貝の隙間に白い靄が見えて、私はそこへそっと爪を差し入れた。ぎこちなく蛸は口を閉ざし、私の爪を拒絶する。思ったように爪を噛んではくれなかったので、私はそのまま目を閉じた。

目覚まし時計を止めようと手を伸ばすと、指先に水が触れた。ゆつくりと身を起こすと、机の上には砂抜きの完了した蛸がある。ボウルの周りには水が沢山飛び散っている。これは塩水だろうか。

蛸は2個あった。魂の重さは21gだという。朝に味噌汁をいただいた後の私の体重は62.3kgになった。

3.

姉が黙って中絶手術を受けたことで両親にこつ酷く叱られていた夜、私は頭上から誰かの声を聞いた。

「お前の姉さんは寝ているか？」

十二時をまわっても階下の怒号は一向に止みそうもない。私は重い瞼を擦って暗闇の影を見通そうとした。しかし、光を遮断した寝室では、その何者かの粘つく気配と薄い影しか見とめられない。

「多分起きてる」

私が答えると、シャリ、と何かが床に落ちる音がした。何者かの手から落ちたのだろうか。

「あんた幽霊？」私の問いに影は答えない。

「死んでるの？」

「ちよつと違う。実を言うと、産まれてもない」静かな声。

「じゃ死んでるんだ？」

「違う」

「なんで？生まれる前ってことは、死んでるのと一緒でしょ？」階下で引き絞った生き物の呼吸音が聞こえる。

ひいーつと、ヒステリックにつんざく悲鳴は地へ急降下して低く唸る慟哭となった。

「違う。死ぬってのは、生きるのをやめることだ。私はまだ生きてもないんだから、死ぬことはできない。」

「ほら！いま！いま、生きてないって言った。死んでるんでしょ？」

「……話にならない、私はこれで失敬するよ」憤懣やるかたない声のする方向はすうと沈み、何者かの気配が遠のいた。

「死ね」

捨て台詞を残して。

4.

タイヤ公園には、襟足ばあが出る。

タイヤ公園というのは、本当は暮町北公園というらしいが、半分埋まったタイヤしか遊具の無い、空き地と言っても差し支えのないくらいの公園だ。それでも近所の健気な子供達はそこへ集まって、乾いた土に絵を書いたり、鬼ごっこやボール投げをしたりして遊んでいた。夏休みのラジオ体操が行われるのはその公園で、私はいつも早めに家を出て、ラジオ体操が始まるまでの間に友達と遊んでいたのだった。

その日は朝から暑かった。私が公園に着くと、友達は何もいなかった。今日は遅れているのかと、私は一人タイヤに座って爪先で土をほじくり返していた。そうしている、後ろで誰かが呻く声をする。振り返ると、楠の裏に誰かがいるらしく、その身体が幹から見え隠れする。屈伸運動を苦しそうに続けている異様に私は怖気だった。そして公園から逃げた。距離が離れても何者かは——いや、私はあれこそがあの襟足ばあなのだと思

った——屈伸運動を続けている。彼女の姿が小さくなる、逆に私の好奇心が膨らみ、公園周りの柵を回って襟足ばあ顔を見てやろうと思った。

木の影からだんだん姿を現し、その肩が、頬が、俯いた頭の頭頂部が目に入る。そして、私は見た。

しかし、彼女が何故襟足ばあと呼ばれているのか、私は知らない。